メタ認知を軸とした社会科の「指導―評価」モデルの開発 (2)
―生徒の記述分析を手がかりに―

金子　遥・東　俊克

Social Studies Class Development of a "Teaching-Assessment" Model Based on Metacognition (2)
-Based on Student Descriptive Analysis-

Haruka KANEKO, Toshikatsu HIGASHI

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第 6 号 （2024年 1 月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.6（January 2024）

メタ認知を軸とした社会科の「指導―評価」モデルの開発(2)

―生徒の記述分析を手がかりに―

金子　遥・東　俊克

（中野区立明和中学校）（寝屋川市立第五中学校）

Social Studies Class Development of a "Teaching-Assessment" Model Based on Metacognition (2)

—Based on Student Descriptive Analysis—

Haruka KANEKO，Toshikatsu HIGASHI

2023 年 8 月 31 日受理

抄録：一連となる本研究の目的は、「主体的に学習に取り組む態度」の「①学び方に特化したものになってしまっている」「②教科依存性の低いものであり、教科の評価の中の 1 つの観点として見取る意義が薄い」とした課題を克服することにある。本稿では、前稿にて開発を行ったメタ認知を軸とする「指導―評価」モデルを実践し、そこから得た生徒の記述分析を行った。その結果、本モデルにて、生徒のメタ認知の働きによる「主体的に学習に取り組む態度」の評価が可能であることを示唆された。また、記述の内容から、冒頭に示した課題である「学び方に特化し教科内で評価する意義が薄い点」の克服を確認することができた。

キーワード：メタ認知、主体的に学習に取り組む態度、中学校社会科、関東地方、授業実践

Ⅰ．はじめに

中央教育審議会答申（2016 年 12 月 21 日）や「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、2019 年 1 月 21 日）などにより、資質・能力の育成を目指し授業改善を図る「指導と評価の一体化」の必要性が明確化された。金子遥・東俊克(2022)は、こうした評価の在り方の内、「主体的に学習に取り組む態度」では特に「①学び方に特化したものになってしまっている②教科依存性の低いものであり、教科の評価の中の 1 つの観点として見取る意義が薄い」ことを指摘し、メタ認知を取り入れた「指導―評価」モデルの開発を行った。その結果、まずは知識と技能を合わせて思考力・判断力・表現力等を発揮したことが見取れる認知系の課題を示すこと、次に認知系の課題の成果物自体を学習者がメタ認知して自己の変容や成長、人間性を認知できる課題を示すことが望まれることが分かった。換言すれば、まずは知識を駆動させた認知系の課題を示すこと、次に「認識しているものの背景や目的までも含めて認識できているかを認識する」というメタ認知を働かせた非認知系の課題を示すことで、主体的に学習に取り組む態度を見とることができる。つまり、主体的に学習に取り組む態度を見とるには、メタ認知を軸として認知系の知識と非認知系の知識を結びつけることをゴールにして、指導とそれに対応した評価を組み立てていくことが有効だと分かった。

そこで、本稿では、開発したモデルの実践を行い、生徒の記述を手がかりに、その分析を行う。

Ⅱ．指導内容

金子遥・東俊克(2022)は、中学校社会科地理的分野の「大項目 C 日本の様々な地域(3)日本の諸地域」関東地方を事例に開発した。それを参考に、以下のような授業内容で授業実践を行った。本研究は、公立中学校の 2 年生に対して、実施したものである。

1. 単元名

「集中か？分散か？ ―東京と関東地方、そしてよりよい日本の姿を考えよう―」

2. 単元の目標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
関東地方に関する資料を活用しながら、関東地方の地域的特色や課題を理解する。	東京一極集中などの社会的事象に対して、人口や都市・村落に着目して、東京大都市圏での過密の要因を多面的・多角的に考察し、今後あるべき東京や日本の姿を表現する。	よりよい地域の実現を視野に、東京大都市圏での過密などの課題を主体的に追究する。

3. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 東京が日本の政治、経済、文化、交通などの中心とした役割を担っていることを理解できる。	① 東京一極集中とした社会的事象を、人口や都市・村落に着目して、東京大都市圏での過密の要因を多面的・多角的に考察し、表現できる。	① 東京大都市圏での一極集中に対する構想を、各時の授業内容を踏まえて、仮説を繰り返し修正・加筆して追究しようとしている。
② 人口の集中により発生した東京大都市圏の都市問題をまとめることができる。	② 関東地方の特色を根拠として、東京の人口を集中すべきか分散すべきかの意思決定を行い、表現できる。	② 関東地方について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

4. 評価課題とルーブリック、模範的解答

1）パフォーマンス課題（評価課題１）

日本中のヒト・モノ・カネが集まる東京。「東京一極集中」と呼ばれています。例えば、これまでの授業で見たように、東京周辺は「過密」が一つの特色であり課題とも言われています。

今日の日本では、その東京に関してある現象が起きていると言われています。それは日本の二分化。「東京」と「その他の地方」とした二分化です。ヒト・モノ・カネが集まりやすい「東京」と、それらが集まりにくい「その他の地方」とした違いが生まれているのです。

東京にどれほどのヒト・モノ・カネが集まっているかはこれから学ぶとして、この「東京一極集中」には対立する二つの意見が唱えられています。一つは、「東京一極集中こそが日本を救う希望であり、さらに集中すべき」とした意見。もう一つは、「東京一極集中が日本を衰えさせる諸悪であり、分散すべき」とした意見です。

そこで、皆さんにはこの単元を通して下の２つを考えてもらいたいと思います。

① まずはここまでの授業を通して、なぜ東京は過密を解決しようとしないのか・できないのかを考えてみましょう。東京にとって、過密は課題であるはずです。しかし、それを解決しようとしない、あるいはできない。その「？」を考えることで東京を分析し、②の判断材料を集めましょう。

② 最後の授業では①を踏まえて、よりよい日本を目指すには、東京の人口を集中すべきか分散すべきかを決めてもらいたいと思います。東京は様々な側面で日本の大部分を占めており、東京の未来は日本の未来と言っても過言ではありません。日本がよりよくなるため、皆さんはどんな判断をしますか？

2）パフォーマンス課題に対するルーブリック

ルーブリック	
A	・関東地方の特色だけではなく他地域の特色も根拠に、意見を主張している。 ・「自然環境」「結びつき」「人口」「産業」「生活文化」など、複数の側面から意見を主張している。 ・非現実的でなく、具体的な意見を主張している。
B	・関東地方の特色を根拠に、意見を主張している。 ・「自然環境」「結びつき」「人口」「産業」「生活文化」など、複数の側面から意見を主張している。 ・非現実的でなく、具体的な意見を主張している。

3）模範的回答（パフォーマンス課題について、A と想定される回答［解決できない・分散派の場合］）

①東京の人口集中の問題は、解決が困難であり、できないのだと考えられる。

【自然地理的な側面】多くの人々は産業や交通の発達といった利便性から平野で生活する。東京を中心とする東京大都市圏は、広大な関東平野があり、交通等の利便性も十分にあるため、快適に生活することができる。その結果、ここまで利便性がある地域からそうでない地域へと移り住む人は少なく、解決に向かわない。

【産業・生活文化・経済的な側面】東京には、企業の本社や大使館といった施設が充実しており、働く場や観光地として発達している。そのため、その他の地方に比べて働く人口も多く、企業や公共施設自体がその他の地方に移動しない限り、人々が移り住むことは難しい。

②私は東京の人口を分散すべきだと考える。その理由は大きく２つある。

一つ目は、地方の衰退を助長するためである。東京の人口は、少子高齢化が進む現在でも増加し続けている。それに対して、他の地方では過疎が深刻である。関東地方の中でも都市部への人口流入が止まらない。このまま東京へヒト・モノ・カネが集中し続けるのであれば、東京周辺の地域社会の存続は見込めないだろう。対策を行わなければ、関東地方の山間部における高齢化と過疎化の進行が示すように、日本各地の貴重な資源や文化・伝統などは失われることになる。

二つ目は、日本は環太平洋造山帯に属しており、地震が多発するという特色があるためである。近年注目されている首都直下型地震が発生すれば東京は壊滅し、日本全体が麻痺するだろう。政治の機関を東京に集中させることは、非常にリスクがあることだ。

4）振り返り（評価課題２）

今回は「関東地方」について学習し、日本がよりよくなるため「集中か分散か」どちらが望ましいかをテーマに学習しました。今回皆さんが取り組んだパフォーマンス課題はその意見が大きく分かれているものですが、皆さんは自分なりの意見を出してくれました。最後の振り返りではもう一歩先を目指してみましょう。

自分の意見を振り返り、「よりよい日本」とはどのようなものか説明しましょう。例えば、世界中から観光客が訪れたり文化を世界に発信したりすることなのか、日本のどこに住んでいても自由に快適に過ごしたり地域ごとの格差がなかったりすることなのか。こうした「よりよい日本」像は、人の数だけあり、今回皆さんが「集中か分散か」を考える上でも背景になっていることです。この背景が異なると意見が対立することもあります。また、この背景を考えることで、自分にとって大事にしている考えやもしかしたら自分の考えと「集中か分散か」という結論がズレていることにも気づくかもしれません。ぜひこの機会に考えを深めて下さい。

5. 単元計画（毎授業の【授業プリント】と「単元を貫く問い」を見通し課題遂行を行う【ポートフォリオ】を活用）

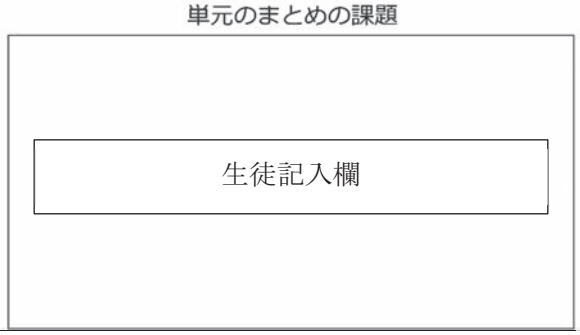
時	主題　○◎問い	・獲得する知識	評価規準　【評価方法】
1	首都東京の役割 ○「首都である東京は、日本や世界でどのような役割を担っているのか？」	・東京は、国際都市「ＴＯＫＹＯ」として、日本各地や世界各地からヒト・モノ・カネを集め、広げる役割を担っている。	知①【授業プリント】 東京が日本の政治、経済、文化、交通などの中心とした役割を担っていることを理解できる。
	◎「過密などの「東京一極集中」という現象に対して、どのように捉え、これからどうするべきか？」（単元を貫く問い） ◎「集中か？分散か？」（パフォーマンス課題）		
2	自然環境 ○「関東地方に人が集まるようになった地理的・歴史的要因は何か？」	・日本最大の関東平野が広がり、気候が温暖で過ごしやすいという自然環境に加え、江戸時代から日本の政治･経済の中心であり、働く場所や学校、商業施設などが数多く集まっている。	態①【ポートフォリオ】 東京大都市圏での過密が解決に転じない要因を、本時の授業内容を踏まえて、仮説を修正・加筆して追究できる。
3	東京の光と影 ○「人口が集中している東京は、どのような課題を抱えているのか？」	・高度経済成長によって東京への人口集中は加速し、市街地は放射状に発展し、東京大都市圏が形成された。 ・過密が原因となって、通勤ラッシュやごみの増加、交通渋滞などの都市問題が日常的に発生している。	知②【授業プリント】 人口の集中により発生した東京大都市圏の都市問題をまとめることができる。
4	人口が集中する地域で発達する産業 ○「人口が集中する地域ではどのような産業が発展するのか？」	・ヒト・モノ・カネだけでなく情報も集まる東京では、サービス業が発達している。また、東京大都市圏は日本最大の消費地であるため、商業活動も盛んである。	態①【ポートフォリオ】 東京大都市圏での過密が解決に転じない要因を、本時の授業内容を踏まえて、仮説を修正・加筆して追究できる。
5	変化する工業地域 ○「なぜ臨海ではなく内陸に新たな工業地が広がったのか？」	・東京大都市圏の人口増加に伴って臨海部の工業用地が不足したため。土地や労働力が豊富な内陸部は整った交通に支えられ、北関東工業地域として発展した。	態①【ポートフォリオ】 東京大都市圏での過密が解決に転じない要因を、本時の授業内容を踏まえて、仮説を修正・加筆して追究できる。
6	暮らしを支える農業 ○「なぜ関東地方は農業産出額も日本最大級なのか？」 ◎「東京は、過密を解決	・日本最大の消費地である東京向けに新鮮な農作物を生産するために近郊農業を行う。 ・関東地方の山間部の多くでは若い世代が移り住むことで高齢化と過疎化が問題となり、都市部との格差が拡大している。	思①【ポートフォリオ】 東京一極集中とした社会的事象を、人口や都市・村落に着目して、東京大都市圏での過密が解決に転じない要因

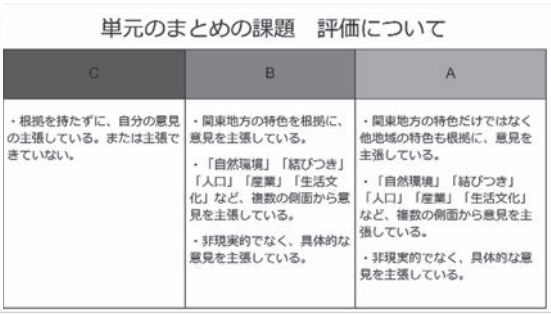
	できないのか？それとも、しようとしないのか？」	・東京は人の集まりを大規模な市場として活用することで、世界トップレベルの発展をし続けているため。その発展は日本各地を支えている反面、地方の衰退も助長している。	を多面的・多角的に考察し、表現できる。
7	パフォーマンス課題と振り返り ◎「集中か？分散か？」	・事実・価値認識を踏まえた意思決定を行う。 ・振り返りを通して、自身の価値観や理想の国家像のメタ認知を行うことで、よりよい社会の実現を視野に向けて課題を主体的に追究しようとする態度。	思②【ポートフォリオ】 関東地方の特色を根拠として、東京の人口を集中すべきか分散すべきか判断し、表現できる。 態②【ポートフォリオ】 意思決定を振り返ることで、自身の価値観や理想の国家像を再認識・再構成することができる。

6. Google スライドを活用した実際のポートフォリオ課題

生徒には、Google スライドを配付し、１人１台端末を活用して入力・提出をさせた。

評価課題１





評価課題２



Ⅲ．実践の結果、分析

ここでは、実践の結果として、生徒数名のポートフォリオを示し、その分析を行う。

1．生徒のポートフォリオ

1）生徒 A の場合

評価課題 1

単元のまとめの課題

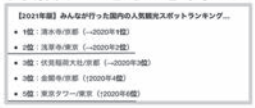
まず第一に、東京は過密を解決できないだろう。その理由は、**東京の産業と文化(生活)にあると私は考える。**　東京は「日本の政治・経済の中心」と呼ばれている。それは、最高裁判所や国会議事堂、銀行の本店、証券取引所といった建物が東京に集中しているからだ。

これらが立ち並ぶことで、「働き手が多くやって来る」→「人が多くなる」→「客足を求め、企業が増える」→「人が多くなる」。という半ばループのような社会の流れが起きているのだ。　また、東京は教育機関や交通も非常に発達しており、**所謂住みやすい町**になっている。だから、利便性を求めた人々が多くやってくるのだ。

ではなぜ、過密を解決する術が無いのか。それは、すでに**社会が出来上がってしまっているから**ではないか。人々はすっかり**「発展した東京」**を当たり前だと思い、それが変わることを受け入れる姿勢ではない。それは私も同様だ。　今、当たり前のように東京で生活をしている。電車一本で都心部まで行くことができるし、コンビニやスーパーだって家から5分もかからない場所にある。こんな便利な場所を手放したいとは思わないだろう。だから、東京に集まった人々を他の地域へ移住させることはできない。企業だって、交通の発達した場所から、人の少ない地域へ移るメリットがないから動かない。そんな現状がある。

これまで、私は**過密は良くない**ことだという立場で意見を書いてきた。だが、過密には良い面も沢山ある。その一例が「観光客」である。この画像を見てほしい。これは日本国内で、多くの人が訪れたスポットである。2位と5位に東京がランクインしている。また、それ以外を占める京都も観光の面で栄えており、人口密度では日本10位に君臨している。このことから、**人口の多いところ＝観光地になりやすい。**ということがわかるだろう。そのため、東京の過密は経済にプラスの影響をもたらしていると言える。このこともあり、東京は過密を解決すると大きな経済効果を失うため、出来ないのだ。以上が東京が過密を解決できない理由である。

私はこれらを踏まえて、この先より良い日本を目指す上で人口は**集中するべき**だと思う。どんどん東京に人を集め、経済を動かし、それにより東京周辺の開拓を進めることが必要だと考える。これは簡単なことではないが、分散するよりもはるかに現実的だろう。今、多くのメリット・デメリットを生んでいる東京一極集中。このデメリットを一つでも多く、解決していくことで、東京過密を誇れるものには出来ないだろうか。　その際、過疎化(若い世代のIターン)についても経済的な解決ができると思う。だから私は、東京に人口を集中することで、更なる**経済効果**を期待でき、より良い日本になると考える。



https://tripnote.jp/japan/popular-spot-ranking

評価課題 2

単元の振り返り

今回は「関東地方」について学習し、日本がより良くなるため「集中か分散か」どちらが望ましいかをテーマに学習しました。今回皆さんが取り組んだパフォーマンス課題はその意見が大きく分かれているものですが、皆さんは自分なりの意見を出してくれました。最後の振り返りではもう一歩先を目指してみましょう。
自分の意見を振り返り、「より良い日本」とはどのようなものか説明しましょう。例えば、世界中から観光客が訪れたり文化を世界に発信したりすることなのか、日本のどこに住んでいても自由に快適に過ごしたり地域ごとの格差がなかったりすることなのか。こうした「より良い日本」像は、人の数だけあり、今回皆さんが「集中か分散か」を考える上でも背景になっていることです。この背景が異なると意見が対立することもあります。また、この背景を考えることで、自分にとって大事にしている考えやもしかしたら自分の考えと「集中か分散か」という結論がズレていることにも気づくかもしれません。ぜひこの機会に考えを深めて下さい。

《より良い日本とは》
「どの地域で暮らす人も皆平等な制度を受けられる」ことこそ、より良い日本だと私は思う。
私は、自分の考えを「人口は集中すべき」と結論づけた。東京の過密が進行すると、デメリットも多くある一方で大きな経済効果を得られると私は予想しているからだ。経済が動くのは国にとってとてもいいことだと思う。だが、果たしてお金は47都道府県に平等に振り分けられているのか気になった。

詳しいことは分からないが、**人口の多い地域にばかり**お金が入れられていると考えられた。「医療費の助成対象年齢」は地域によって大きく異なることをご存知だろうか。分かりやすくいうのであれば、「4歳までは医療を無料で受けられる地域」と「18歳までは医療を無料で受けられる地域」があるということだ。これは、それぞれの地域の医療体制・方針によるものだが、経済も関わっていると言える。　経済的に余裕がある地域ほど、一人一人の生活はより丁寧なものになる。そんな不平等な社会でいいのだろうか。

私は、これまでの学習の中で過密に関するメリット・デメリットを沢山学んだ。だからこそ、過密は利用するべきだと考えたのだ。だが、その前にまず、社会の経済について知り、改善方法を学んでいく必要があると知った。改めて、私の思い描くより良い日本は、経済に余裕を持つことで、一人一人を大切にできる環境であることだ。

生徒 A は、評価課題 1 に対して、東京の過密は「解決できない・人口は集中するべき」という立場を示した。その大きな理由として、産業と生活文化、さらに観光などの経済など、複数の側面からそのメリットを示している。単元の学習を通して、関東地方のサービス業の発展や地域格差といったことを学び、それらの認識を生かして取り組む認知系の課題に応えている。

評価課題 2 に対しては、「人口は集中するべき」という評価課題 1 の結論に対して、「皆平等な制度を受けられる」という「よりよい社会」の実現を追究しているが、「人口の多い地域に」よって不平等が起こるのではないかという懸念を示唆している。つまり、認知的な課題に対する「人口集中」という自己の結論の背景を自己の考える「よりよい社会」と関連させている。

2）生徒 B の場合

評価課題1

単元のまとめの課題

①私は、東京は過密を解決できないのだと思う。
過密が問題になっているように、東京は人口が多い。1度集まった人口をあちこちに分散させるのはなかなか難しいのではないだろうか。「日本中のヒト、モノ、カネが集まる東京」と言われているように、東京は他の地域よりも交通網などが発展していると思うし、自然環境から見ても平地であり、他地域と比べると、火山もなく、海などにも面していないため、災害面でも比較的安心な部分がある。また、教育機関や大使館、政治機関など、重要な機関が集中しているのも、東京が過密を解決できない大きな理由だと思う。
②東京は、これからは人口を分散していくべきだと思う。
理由は、他地域にしかできない仕事もあると思うからだ。例えば農業など、東京でもできなくはないだろうが、他の地域でやった方が、土地の広さや気候などの点から東京よりも効率良くできるのではないだろうか。また、京都がやっていたような、「伝統的な街並みの保護」というのも、東京ではなかなかできないのではないだろうか。古くから続く文化の保護などの観点からも考えると、やはり東京は人口を分散させるべきだと思う。

評価課題2

単元の振り返り

今回は「関東地方」について学習し、日本がより良くなるため「集中か分散か」どちらが望ましいかをテーマに学習しました。今回皆さんが取り組んだパフォーマンス課題はその意見が大きく分かれているものですが、皆さんは自分なりの意見を出してくれました。最後の振り返りではもう一歩先を目指してみましょう。
自分の意見を振り返り、**「より良い日本」とはどのようなものか説明しましょう。**例えば、世界中から観光客が訪れたり文化を世界に発信したりすることなのか、日本のどこに住んでいても自由に快適に過ごしたり地域ごとの格差がなかったりすることなのか。こうした「より良い日本」像は、人の数だけあり、今回皆さんが「集中か分散か」を考える上でも背景になっていることです。この背景が異なると意見が対立することもあります。また、この背景を考えることで、自分にとって大事にしている考えやもしかしたら自分の考えと「集中か分散か」という結論がズレていることにも気づくかもしれません。ぜひこの機会に考えを深めて下さい。

私が思うより良い日本、というのは日本のどこにいても快適に過ごせて、その地域の特色が表れた街並みなどが見れる、ということだ。日本のどこに行っても、快適に過ごせて、その地域の気候や伝統などが表れた街並みに表れているのが見られて…そんな1度で2度以上楽しい、みたいな日本がより良い日本、と言えるのではないだろうか。また、それを求めて世界中から人が集まってきて、ついでに経済も発展してくれれば尚いいことだと私は思っている。

生徒 B は、評価課題１に対して、東京の過密は「解決できない・人口は分散するべき」という立場を示した。その大きな理由として、自然環境や国際都市などの側面から挙げられている。単元の学習を通して、東京が日本の政治、経済、文化、交通などの中心としての役割を発揮していることを踏まえて、認知系の課題に答えている。

評価課題２に対しては、「人口は分散するべき」という評価課題１の結論に対して、「どこにいても快適に過ごせ」る点と、「その地域の特色が表れた街並みなどが見れる」という点という「よりよい社会」の実現を追究している。それは、評価課題１で示した農業をより広くより適した気候の土地で行う点と京都などの伝統的な街並みの保護を行う点で示されている。つまり、認知的な課題に対する「人口は分散するべき」という自己の結論に対して、快適さや地域の特色といった概念、さらに経済的な発展といった点を補足し、自己の考える「よりよい社会」を説明している。

３）生徒Ｃの場合

評価課題１

単元のまとめの課題

東京は、過密を解決しようとしないのだと思う。
私は、その理由を人口と、産業・経済の視点で考えた。
この単元の学習で、過密のメリット・デメリットがそれぞれあることがわかった。それらを比べて私は、いくつかのデメリットよりも「経済や産業が発展しやすい」というメリットの方が大きいと考えた。
東京には現在、多くの企業があり、そこで働くために地方から移住してきた人も多い。多くの企業があると、それぞれがよりよい製品を作ろうとするため、経済や産業が発展すると思う。そして、産業が発展すると国内や海外から東京に訪れる人が増える。訪れる人は観光、宿泊にお金を使うため、訪れる人が増えれば経済も発展がまた発展していく。人口が増えることでこのような経済や産業の発展が進む流れができるため、東京は産業や経済がどんどん発展していて、過密を解決しようとしないのだと考えた。

しかし、今後は人口を分散するべきだと思う。
なぜなら東京がどんどん発展していく一方で、今まで学習したように地方ではストロー現象が起きていて、このまま集中が進めば他の地域ではさらに過疎化が進んでいってしまうと思うからだ。東京に移り住む人が増えれば、その分地方に住む人は減っていくということになる。するとその地域のお店が潰れてしまい、経済や産業が衰える。また、お店が減ってしまうと観光などに来る人も減ってしまう。このように一箇所に人口が集中しすぎるとそれ以外の地方では、経済や産業が衰える流れができるため、今後は人口を分散すべきだと考えた。企業や大学を移転させることで、東京への移転を考える人は減ると思う。また、コロナ禍でリモートワークが注目されているので、企業がリモートワークを推奨していけば、企業を移転しなくても人口の分散に繋げられると考えた。

評価課題２

単元の振り返り

今回は「関東地方」について学習し、日本がより良くなるため「集中か分散か」どちらが望ましいかをテーマに学習しました。今回皆さんが取り組んだパフォーマンス課題はその意見が大きく分かれているものですが、皆さんは自分なりの意見を出してくれました。最後の振り返りではもう一歩先を目指してみましょう。
自分の意見を振り返り、「より良い日本」とはどのようなものか説明しましょう。例えば、世界中から観光客が訪れたり文化を世界に発信したりすることなのか、日本のどこに住んでいても自由に快適に過ごしたり地域ごとの格差がなかったりすることなのか。こうした「より良い日本」像は、人の数だけあり、今回皆さんが「集中か分散か」を考える上でも背景になっていることです。この背景が異なると意見が対立することもあります。また、この背景を考えることで、自分にとって大事にしている考えやもしかしたら自分の考えと「集中か分散か」という結論がズレていることにも気づくかもしれません。ぜひこの機会に考えを深めて下さい。

よりよい日本とは、それぞれ都道府県の文化や風習が大切に受け継がれていくような国だと思う。日本の都道府県にはそれぞれ、伝統的な建物の造りや郷土料理、年中行事などがあり、中には世界遺産にも登録されているものもある。そのような日本の魅力である文化が受け継がれずに、薄れてしまったらもったいない。文化を途切れさせないためには、単元のまとめでも書いたように人口を分散させていけばよいと思う。なぜなら、若い人がどんどん大都市に移住していってしまうと、文化が発展するのは大都市だけで、他の地域では次の世代へ受け継ぐことができなくなってしまうからだ。そのためには、SNSを利用した魅力の発信など、若い世代に興味を持ってもらえるような活動を進めると良いと思う。このように、「大都市だけが」文化の中心になるのではなく「全ての地域が」それぞれ文化の中心といえる日本が理想だと考えた。

生徒Ｃは、評価課題１に対して、東京の過密は「解決しようとしない・人口は分散するべき」という立場を示した。その大きな理由として、産業や経済のメリットの側面から挙げられている。単元の学習を通して、東京大都市圏の人口や観光客数といったサービス業について捉え、メリットの多さを指摘するという形で、認知系の課題に答えている。

評価課題２に対しては、「人口は分散するべき」という評価課題１の結論に対して、「文化や風習を受け継がれていく」という「よりよい社会」の実現を追究している。それは、評価課題１で示した「人口は分散するべき」と手段によって、達成しやすくなることを示している。つまり、評価課題１で考えた人口分散に対して、その目的として日本全体での地域活性化(「全ての地域が」と示されている点)というメタ認知を働かせることで、認知系の課題と非認知系の課題を結びつけている。

2. 分析

ここでは、知識を駆動させた認知系の課題と「認識しているものの背景や目的までも含めて認識できているかを認識する」というメタ認知を働かせること促す非認知系の課題の２段階での評価課題を通して、メタ認知が軸となり認知系の知識と非認知系の知識を結びつけられたかという視点で分析を行う。

（1）生徒 A の場合

生徒 A は、認知系の課題に対して、「人口は集中するべき」という結論を示した。それに対して、「皆平等な制度を受けられる」という非認知系の課題に対する結論を示した。ここでは、生徒 A 自身も指摘するように、東京の一極集中と地方の多極化といった、矛盾している考え方を示している。つまり、単元の学習を通して、経済発展を優先して一極集中という結論を出したが、よりよい日本として地方多極化の姿をメタ認知し、「こうあるべき姿」と「こうありたい姿」の違いを認識したといえる。

（2）生徒 B の場合

生徒 B は、認知系の課題と非認知系の課題に強い関連が見られた。それは、「東京の人口分散」と「どこにいても快適に過ごせ」るよりよい国家像が直結していると考えられる。しかし、メタ認知が働いているとは言えない。なぜなら、「人口分散」という結論を補足しているにすぎず、伝統文化の保護などのために人口分散をよりよいと考えた背景まで踏み込んで考えることができていないからである。「様々な地方の良さを学んできたことが各地域の保護を大切にしたいという考えに繋がっている」や「人口分散によって地方の文化財保護を充実させ、それが観光客の増加に繋がり経済発展を促す」といった自分の結論の背景や目的に繋がるメタ認知に至っていないからである。

（3）生徒 C の場合

生徒 C は、単元での学習を活用して、「人口は分散するべき」という結論を示した。そして、これを手段として捉え、地域活性化という最終的な目的(よりよい社会、国家像)を示した。つまり、人口分散という認知系の課題に対する結論をメタ認知している。

Ⅳ. 成果と課題

以上、金子遥・東俊克(2022)で示した単元モデルを実施し、生徒の記述分析を検証してきた。最後に、本研究の成果と課題をまとめる。

1. 成果

成果は２点挙げられる。１点目は、実際にこのモデルを活用した授業で、生徒 A や生徒 C のように、「認識しているものの背景や目的までも含めて認識できているかを認識する」というメタ認知を働かせることができ、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が可能なことを示唆されたことである。認知系の課題と非認知系の課題との２段階の課題を通して、生徒 A のように、自己の認識を様々な側面から見取り、「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度」(中学校学習指導要領 社会編)の育成を促した。２点目は、主体的に学習に取り組む態度の課題として指摘した学び方に特化し教科内で評価する意義が薄い点を克服したことである。今回抽出した生徒３名は、あくまでもそれぞれ学習した関東地方とさらにそれを包括した日本(国家像)について記述していることが、２つの課題に対する生徒の記述分析を手がかりにすると分かった。学ぶ方法だけでなく、学習した内容にも強く関連する評価の在り方を示唆することができた。

2. 課題

課題は２点挙げられる。１点目は、メタ認知が働かなかった生徒への手立てである。生徒 B は、人口分散のローカルな問題とよりよい国家像というナショナルの問題を混同し捉え、同じような結論を記述している。こうした生徒に対して、例えば生徒 A や生徒 C といったメタ認知を働かせた生徒の記述を活用したフィードバックなどによって、その後の変容が見られるかといった点が課題となる。２点目は、他の単元や他分野との関連である。関東地方では「人口」の項目について、ローカル・ナショナルの２段階の視点で課題を設定したが、例えば「自

然環境」の項目ではどのような視点の２段階の課題が適切か、歴史的分野や公民的分野ではどのような課題が適切かなど、関連させる必要がある。なぜなら、内容への関連が強いメタ認知を軸とした評価は、生徒 B の記述のように認知系の課題と混同されやすいため、様々な単元で実施することを通して、メタ認知自体も鍛えていく必要がある。今後は、このモデルを活用してさらに開発・実践を繰り返していく。

引用・参考文献

Charles Fadel・Maya Bialik・Bernie Trilling 著,岸学監訳,関口貴裕・細川太輔編訳(2016)『21 世紀の学習者と教育の４つの次元　知識,スキル,人間性,そしてメタ学習』北大路書房.

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第 197 号）」2016 年 12 月 21 日.

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」2019 年 1 月 21 日.

金子遥（2021）「メタ認知による抽象化の社会科授業開発―「日本の選挙制度」を例に―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第 3 号,pp.227-236.

金子遥・弘田真基・田中曜次(2022)「歴史的な見方・考え方を働かせる授業開発(Ⅱ）―歴史教科書の比較研究を通して―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第 4 号,pp.229-236.

金子遥・東俊克（2023）「メタ認知を軸とした社会科の「指導―評価」モデルの開発―中学校社会科「関東地方」を例に―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第 5 号,pp.99-108.

国立教育政策研究所　教育課程研究センター(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　中学校編　社会』東洋館出版社.

松尾知明(2015)『21 世紀型スキルとは何か―コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較―』明石書店.

三木健詞(2020)「中学校社会科の「日本の諸地域」学習における「歴史的背景」の扱い」『拓植大学教職課程年報』3 巻,pp.20-37

文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説　社会編』東洋館出版.

三宮真智子(2008)『メタ認知―学習を支える高次認知機能―』北大路書房.

田中耕治編(2018)『よくわかる教育評価　第 2 版』ミネルヴァ書房.

田村学(2021)『学習評価』東洋館出版社.

付記　本稿は、金子が在学中から取り組んでいた研究を、学習指導要領の下で整理し開発したモデル授業を実践したものである。金子が授業実践・分析を行い、東が全体の構成を担当している。